

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 柳田国男『山の人生』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 47 回のツイキャス読書会の課題図書は、柳田国男の『山の人生』です。

青空文庫はこちら http://www.aozora.gr.jp/cards/001566/files/52505_50610.html

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『山の人生』 感想文

山の生活を読んでいて私もNHKスペシャルで見たイゾラドやヤノマミなどのジャングルの奥で生活する人達が思い浮かびました。

イゾラド達の住む場所はどんどん減らされ数十年後にはいなくなるという話や、文明を持たないと言いつつも政府の保護のもと町の人たちと僅かながら交流がある点は、サンカの人達と共通するなと思いました。

産後発狂して山に入って行くとされる女性が裸で会陰部だけ葉っぱで隠していたという話は、創世記で知恵の実を食べた後のアダムとイブを連想させました。神から造られた人間が樂園を追放され地上に下りたのなら、日本の国土の大半を占める山や森林に人間が入って行くと言うのは面白い話だなと思いました。ただ文明社会が樂園とは思えませんが。

もうすぐ4歳になる私の娘は存在しないおばあちゃんやお兄ちゃんの話の時々し、「この前おばあちゃんと遊んだんだよ」とか「お兄ちゃんはおそこにいるんだよね」などと言ってきます。もしや我が子も神隠しに会いやすい子供でしょうか？

実際に全国を歩いて土地土地に伝わる話を聞いて回った民俗学者、柳田国男先生に頭が下がるお思いです。自分が生まれ育った山と田畑しかない田舎の集落や季節毎にあった自然に感謝する祭り事を思い出しました。

(おわり)

『山の人生』 感想文

私は田舎育ちなので山は身近に感じていて、今はもう居ませんが実家に住んでいた頃、車で 30 分ぐらいの所にある祖父と祖母の家に行くと鮮やかな緑、深い緑が連なってこちらに迫って来るような山並みを思い出しました。

きっと、このお話も自然に親しみながら山に住む人たちのお話かな？と思っていたら、いきなり貧しい家の子供たちが自ら父親に斧で殺してくれと言うショッキングなお話で始まったので、びっくりしました。

きっとそこには私には分かりませんが深い理由があるように思いました。

いろいろ興味深いお話がたくさんありましたが、文章が難しくてちゃんと理解出来ているか分かりませんが、原平合戦のお話や義経記を見てきたように話す事で長生きの証拠みたいになっている所が面白いと思いました。私が一番印象に残った所は、神隠しにあった者の家族など残された人の気持ちを書いていた所です。

大切な人が突然いなくなったら、その人自身の意志というより神隠しや悪い人に連れ去られ、どこか別の場所で元気で暮らしているのではないかと思うことで癒されたりするかもしれないから、普通ではありえないような事でも不思議な事は信じられてきたのかなと思いました。

今の世の中は、科学的にも進歩して神隠しや迷信などは説明できる事もあるかもしれませんが、でも説明しきれない不思議な事が世の中にはあると思うので、昔からの言い伝えなどは信じたいと思いました。山にはきっと魔物が居るような気がします。

(おわり)

『山の人生』感想文

私はまず作者が(自序)で書いている「できるだけ多くの国民の過去の経験、感想、行為を観察し、記録し、極めることが社会改造の準備には必要だ」に納得した。

過去から知識を得て未来を考えることはとても大事だからです。

内容については、理解しづらい箇所がいくつかありました。

「神隠し」は、大人の場合は、「逃避、家出、強姦、いじめ」子供の場合は「誘拐、夢想、嘘」だと思います。

当時の人々が「神隠し」にしたのは、「その家にとって恥ずかしい出来事はなかったことにしよう」という忖度と「かみを信じているのでそれに関わる出来事は騒ぐと災いが起きる」という恐怖心、それから作者も言っていますが「死んでいて欲しくない」という愛情からだと思います。

また、神隠しにあった人を探す時、大声を出して一緒に歩いたり、鉦や太鼓を鳴らすのは熊や狼に襲われないようにするためだと思います。

2、3日で捜索を辞めたのも、情報も知識もなく、神を信じ、恐れていた当時の人々にとっては、平穏無事に生きていくためにとった精一杯の行動だと私は考えました。

全体を読んで思ったことは、言い伝えというのはかなりいい加減であるということです。主観的な考えを入れずに事実を忠実に記述することが大事であることを感じました。また人間は自分の都合の良いように解釈したり、意図的に作り話にしたりすることも分かりました。現在でもこれは気をつけなければいけないことだと思います。

残念に思ったのは、作者自身や先生と呼んでいる人がまだこの時代では、人間を差別しているように感じられた記述があったことです。山男、マタギ、女性「女は不平や厭世のために山に隠れることはない。気が狂っていたにちがいない」という記述です。

(おわり)

『山の生活』 読書感想文

私は子供の頃、3～4年間奥会津の親戚の家に住んでいました。

この「山の人生」を読んでいると、東北地方の事が書かれていてとても懐かしい気持ちになりました。当時その家の裏に森があり、獣道もなく鬱蒼としていて入ってはいけないと注意されていたのですが好奇心が強く、よく内緒で入っていました。熊も出るので今思うと冷や汗物です。背の高い草やツル、蜘蛛の巣などがからむだけで面白い事なんて何もないのですが、ひきよせられるように何度も探検しました。

奇跡的に事故にあわず今生きていますが、なにかあって命を落とし、ずっと発見されなくてもおかしくない状況でした。実際にそういう事を聞かされていました。

山は厳しいです、それとは反面に山に入ればしばらくすると、気のせいかもしれませんが何かに守られているような安心感もあります。独特な空気感です。当時は子供だったのでそれが何かはわからなかったのですが、「山の人生」を読んでいると、神さまに近づいて、神さまを感じていたのかな、と思い当たりました。

この作品は不思議な事や、どうしようもなくやるせない事がたくさん書かれてありますが、子供の頃の山での神秘体験で、何となくですがわかるような気持ちがあります。

「こういう狭い場処や危険な所も、モノに導かれると通行ができるのだが、ただその人が屁をひるときはモノが手を放すので、たちまち絶壁から落ちることがある」

こういう文章にすごく惹かれます。

「特別なる交際が餅をもって始まったという話は、もちろん話であろうが今に方々に伝わっている。これを下品だとして顧みないような学者は、いつまでも高天原だけを説いているがよい」

このセリフすごくかっこいいです！

(おわり)

『山は心の宿』

「人にはなおこれという理由がなくてふらふらと山に入って行く癖のようなものがあつた。少なくとも今日の学問と推理だけでは説明することのできぬ人間の消滅、ことにはこの世の執着の多そうな若い人たちが、突如として山野に紛れこんでしまつて、何をしているかも知れなくなることがあつた」(本文『三凡人遁世のこと』より引用)

私の実家が山を切り開いて造成された団地だったため、切り残った山が自宅のすぐ近くにあつた。私とその山に憧れを抱き、その山の存在が心の支えになつたのは、高校生の頃からだ。今でもその気持ちは変わらない。帰省したら山に近づきたくなる。けれど有刺鉄線の向こうに近づく勇氣はない。「心の宿」でちょうどいい。

私はこの小説を読むまで、実際に山に入って生活する人を想像したことがなかつた。山に入る人の心情を一人ひとりインタビューして聞いてみたい。とても想像力を掻き立てられる。しかし、山に入る人からその理由を言語化してもらうのは果たして可能なのだろうか？聞き出そうとしても無理かも知れない。理屈じゃないのかも知れない。

そしていったん山に入れば、出ることは稀で、雨風をしのぎ、火を通さない食事(生食)をし、風貌も変わる。だんだん見かけも肉体も山仕様に「変わる」と考えるのか、「元に戻る」と考えるのか。いずれにしても事実として明らかに風貌が変化するのは、現在の姿形が必ずしも人間の本来の姿ではないことに気づかされる。逆に山の人間からすると、町で暮らす人の容姿は鬼や鬼婆に見えるのかも知れない。

私が最も気持ちを奪われたのは、産後すぐに山に入った数々の女性の話だ。同じ女性として、種として、それこそ理屈では表現できない同類項の氣質を自分も抱えているかも知れないと、考えさせられる。私がもし発作的に人の世を飛び出したとして、たまたま近くの山に入るのは、たしかに不思議な事ではない。むしろ吸い込まれる感覚なのかも知れない。

山は圧倒的だ。山には神がいる。神の概念がいまだに整理できていない自分だが、それが山であればずっと受け入れられるのは生まれ故郷の必然なのかも知れない。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 包んでくれるのはあなただけ 』

私は、山に全く造詣がない。従って、山に近づかないし、近づきがたい。

たぶん、馴染みがないのだ。幼き頃より、沿岸地域で暮らすことが多く、今の住居も実家も海のそばだ。一番最近の登山の記憶も中学の遠足だ。それも、宮島にある弥山(みせん)で標高が535mという丘みたいな山だ。中国地方は元々高い山もない。

それでも、大人になってからは森林浴を兼ねて山の遊歩道くらいは歩く。普段は、たくさんの木々や植物に囲まれることがないため、空気感が全く違う。すがすがしいのと同時に、ザワザワとした木々の葉のこすれる音が響いて、何ともいえない怖さから足を止めてしまう。さすが御神体にもされる山の姿だ。海は親しい存在だが、山に対しては畏怖の念を抱いてしまう。

だからこそ、この作品を開く際にどのような世界が広がっているのかわからなかった。

それは、山を背景に炭焼き人の子殺しの話から始まる哀しい人間の姿が羅列してあった。この子殺しも、実は子が親を思うハートフルな話だ。しかし、生理的欲求を満たすことさえできない社会が舞台になると、とたんに残忍な事件となる。家族で滝に飛び込んだ家族も然り…。

同じ女性として心が痛いのは、産後に発狂して山に入るくだりだ。たぶん、今でいう育児ノイローゼなのだろう。当時にノイローゼという概念がなかった為に、誰にも受け入れてもらえず、山に入るしかなかった。凡人遁世の記述でも、精神を病んだ者に対してのバックアップも当時はなかったであろう。山だけが避難場所で、山だけが包んでくれたのかもしれない。伝承にも深い意味があるのだ。

神隠しの記述のところでは、ふと昔の記憶が蘇る。私も神隠し未満だったのだ。幼い頃は親の目を盗み、上手に鍵を開けてよく脱出していた。二つか三つの頃だ。それが昼間ならまだよいが、夜でもお構いなしだった。まだ夜が怖くなかった幼い私は、ひとりで夜道を歩き、暗い公園でブランコをこいだ。ひとしきり遊んだ後戻ると、親が搜索願の電話をしている最中だった。「本籍地から言えって警察がいうから、10分くらい説明している間にあなたが帰ってきたわ。」と今では笑い話だが、現代ではそうはいくまい。誰かに連れ去られて永久に「神隠し」だ。幸い神に隠されなかった私は、こうやって「山の人生」を読めている。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「山の人生」

長野県の北の方、新潟との県境に妙高市がある。『山の人生』にも触れられているが、ここに山男が出るという。私も、勤め人だった頃よく先輩に誘われて、アパグループのやっている妙高のゴルフ場に行った。ゴルフの帰りに、ミューミサというラーメン屋が連れてってもらった。ドライブイン(死語)っぽい昭和な佇まいで、70年台にタイムスリップした気分になる。玉ねぎとニンニクたっぷりの甘い感じの味噌ラーメンだ。胃が元気でないと食べられないラーメンだと思った。好きな人は好きだと思う。山の食べ物といった感じだ。

私は山国の出身なので、山が見えないと落ち着かない。しかし、山に行くことはほとんどない。人混みが苦手で、街なかを歩くと2時間くらいで、家に帰りたくなる。かといって山が好きなわけでもない。部屋で本を読んでいるのが好きな人間なので、仕方ない。

山男みたいな人は、実際にいるし、山で暮らしている限り、山男みたいに生きていけるような部分があると思う。自然の多いところに住んでいる人は、ストーカーになりにくいというのを、ストーカーについての新書で読んだ。『人間の力の及ばないもの』を指すというのが、欧米の『自然』である。逆に言えば、都会は、人間の嘘でできている。不自然極まりない生活なのである。

私はどうも、バカ正直なところがあって、気持ちが表情や声にすぐ出てしまう。ダメだなあと思うのだが、すでに手遅れで、治しようがない気がして、諦めている。いつか飯綱に山小屋を買って、立派な書齋をこさえて、独りで暮らしたい。そして、100歳すぎるまで生きて、死を悟ったら、静かに冬山に入山して、人知れず、生まれる以前の状態に戻りたいと思っている。

焚き火にあたって、なにか牛のいばふ如く話す山男。山に硫黄を取りに行つて、山男に首をねじ切られて死んだ男の話。これはいずれも妙高の話だった。

私の山小屋には、きっと山男が訪ねてきてくれるような気がする。意外に気が合うような気もする。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343